
葡萄酒のように

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葡萄酒のように

【Nコード】

N6207T

【作者名】

ウル

【あらすじ】

霧島透はある日友人から、ある殺人事件についての話を聞く。やがてゆっくりとよみがえる、幼き日のいまわしい記憶。すべてを思い出したとき、その手から喪われるものは。葡萄酒の色は、何色だ。古い作品を多少手直し。転載作品。

「いつだったかなあ」

青木博がわざとらしく口にした。

彼が長話を始めるときは、たいていそう前置くことを霧島透は知っていた。またその話が最低でも二十分は続くことも、十三年の付き合い合いで了解していた。

終点まではまだまだ時間がかかる。

家に着くまでのあいだ、こいつの話で時間を潰すのも悪くはないだろう。

透は読んでいた参考書を閉じると、

「どうした？」

とうながした。

横に座る博は我が意を得たりと話し始める。

「いやあさ、おとといスキー行ったときに思い出したんだけど」

「あーそっぴや行ってくつて言ってたな。それで？」

「たぶん俺が四歳ぐらいのときなんだけどさあ、殺人事件があったんだよ」

さほど大きな声でもなかったが、博の声はバスの車内に響いた。

しかし、特に他の乗客たちが変わった様子はなく、透はそれが自分の心中のみで反響したのだと気づく。刹那、不穏な気配が胸をよぎった。

「……なんだよ。急に生臭いこと言いやがって」

「おい、いまちよつとビビッたる」

「ほつとけ」

からからと笑う親友につつかれ、透は軽い台詞でごまかす。

「ま、俺も人のこと言えないけどな」

それから、つと真顔になった博に、透はなぜか戦慄に似たものを

覚える。

これはなんだろう。この、何かがよみがえりそうな気持ちは。漠々とした胸騒ぎはどこから来るのだろうか。

「俺も思い出したときはびっくりしたよ。なんつーか、やっぱそういうのって別世界のことってイメージじゃん」

「ああ」

曖昧に頷きながら透は車窓を眺める。

何がこんなに俺を不安にさせているのだろうか。

空はインクを垂らすように、じわじわと薄墨色に染まっていく。

それと同調して、西の方から忍び寄るように雲が近づいていた。もうすぐ雪になるのかもしれない。

「どこで。どこであっただ、その事件」

博もぼつつとしていたらしく、透が尋ねると驚いたように顔を向けた。

「ああ。雪山なんだ。スキー場。たしかあんまりでかくはなかったはずだな」

「だったら、ヒメユキじゃないのか」

透は市内のスキー場のひとつを口にした。

規模は小さいが、昔から雪のコンディションが良いことで知られるスキー場だ。周囲には温泉街もあるため、わざわざ遠方から来る客も多いらしい。

博は眉を寄せ、記憶をたどっている。

「うーん。どうだろな。俺も子供の頃から父さんにあちこち連れまわされてたし、そこら辺、はっきりしないんだよ」

たしかに幼い頃から彼のスキーの腕前はプロ級だった。

とにかく、と博は言う。「スキー場で大学生の死体が見つかったってことははっきり憶えてんだ」

死体 という生々しい言葉に、自分たちが話題にしている内容がにわかに現実味を帯びる。その感覚はどうあっても快いものとは

言いがたかった。

「なんだ。別に事件に巻きこまれたわけじゃないのか」

「まあ、そりゃあな。死体を見たわけでもないし。……っーかお前、なんか残念そうだけど？」

「思ってたねえって」

透は笑いながら返した。博もつられて破顔する。

二人は話が始まってから最初の笑顔を見せた。強張った、硬いものではあつたが。

「まあ、とにかくさ、その男が死んだ日に俺もその同じスキー場にいたみたいなんだよな」

透は頷く。「けどよく憶えてるな。四歳だったんだろ？」

「同じスキー場にいたから、やっぱり印象が強かったんじゃないかな。って言っても、おとといまで忘れてたわけだから、大したことないと思うけど」

「そうか？ 俺は四歳のときのことなんか、なんにも覚えてないぞ」
「普段はそうでもさ、なんかのきっかけで急に思い出すもんなんだよ」

記憶つてのは不思議だよなあ。博がひとりでうんうんと頷いてるので、透は話題を切り替える。

「でもさ、死体が見つかったってだけじゃ殺人とは言えないんじゃないのか？」

まさかあの小さなスキー場で遭難するということもないだろうが、何事も絶対とは言いつれない。

だが、博は透の疑問をすぐに苦笑いで否定する。

「いや、事故じゃないのはたしかなんだ」

「どうしてだよ」

自分ののどを指差しながら博が答える。「ストックで一突きだ」
「頸動脈か」

「たぶんな。犯人は相当返り血を浴びたんだろうな」

「エグいこと言うなよ」

「頷動脈って言い出したのはお前だろ」

透は自分がこの事件に言い知れない興味と恐怖を覚えていることを自覚していた。軽い会話。否、軽く装った会話をつづけながら彼は考える。

「なあ。その男、ロッジで殺されたのか？」

「いや、次の年の春に死体が見つかったんだ。どうも雪に埋もれて見つかなかつたらしくくてさ。スキーコースとは違う林の中だったっていうのもあって」

「次の年？」透は博の言葉を聞きとがめた。

「そうだよ」

「じゃあ、その男が殺された日はどうしてわかったんだ」

透がそう尋ねると、博はなぜか大きく頷いた。

「俺もそれは忘れてただけで、昨日一晩考えて思い出したんだ」

「なんだよ」

博の言い回しが回りくどいのはいつものことだが、さすがの透も気が急いだ。

「リフト券だよ。リフト券」

「リフト券？ …… ああ、そうか。なるほどな」

一瞬眉を寄せてから、改めて、詠嘆するように透は言った。

死体が雪に埋もれていたとすれば、いつ殺されたのかはわからない。生活状況にもよるだろうが、いつ失踪したのかを日にち単位でぴたりと特定することは、現代の科学捜査でもなかなか難しいのではないか。

しかし、もしもその日のリフトの乗車券がポケットに入っていたなら、状況は変わる。殺害日は簡単に特定することができるだろう。「でもさ、どうして見つかなかつたんだ？ その男」

「どういう意味？」

「普通、家族が捜さないか？ 警察に連絡したら、もっと早く見つかったはずだろ」

博が頷く。「そそ。俺もそれは思ってたんだ。いくらなんでも届出がないのは変だよな」

二人が考えこんでいると、独特の節回しでのアナウンスが入る。

「おお。もう終点か」博が立ち上がる。

「完全に夢中になつてたな」

笑いあつてバスを降りる。

「今日の話は結構面白かったぞ。お前にしては」

「うっせえ。最初のマルでやめとけよ」

透と博は、降りるバス停は同じでも、帰る方向は真逆である。

「じゃあな」

「おう。また明日」

二人は背を向けて歩き出した。

透は宙に浮いた時間を歩いている。

彼の家は住宅地の奥にあるため、バス停からは歩いて十五分以上かかってしまう。しかし、彼はこの時間が好きだった。

学校での自分。友人と過ごす自分。家での自分。

霧島透という存在は、目下のところこの三要素で構成されている。けれど、この時間だけはそれらには含まれない、確固とした三角形からわずかに遊離した時であるような気がして、それが妙に心地良い。

「殺人事件……か」

不穏で恐ろしいはずなのに、でもなぜかありふれた、響き。

「あ」

不意に気づく。事件のその後を聞いていなかった。

犯人は捕まったのだろうか。見事に逃げおおせ、いまもどこかで平凡な、当たり前前の暮らしを謳歌しているのだろうか。

明日にでも聞いてみよう、彼は決心を固めた。

先ほどバスの中で見た黄昏はもはや、西の端を汚す小さな染みになり果てている。空は着実に夜へと姿を変えようとしている。途

方もない面積と質量をもつ暗やみに。

今年はあまり雪が積もらない。

降雪がすくないわけではなく、暖かい日が多いので雪が降ってもすぐに溶けてしまうのだ。

そんなことを思いながら歩いていると、ふとほおに冷たさを感じた。

「やっぱ降ってきたか」

空を見あげれば、無数の綿雪のシルエツトが目に入る。透は足を止めた。

コートのポケットから手を出して、雪を受け止める。

雪はいい。雪のすばらしいところは、匂いだ。雪の匂いは香辛料のようだ。なぜだろう、とても懐かしくて息苦しい匂いだ。

思い切り息を吸いこんで、止める。

待ち構えていたかのように、どっと記憶があふれてきた。

彼は吹雪の雪山を歩いている。

夜だ。記録的な積雪を記録した吹雪の夜。

彼は黙々と、まるで罪人のように木々の合間を抜けてゆく。

ひたすらに頂上を目指している。そのことだけがはっきりとわかる。

雪山を歩く記憶の中の彼は、いまよりもずっと幼い。

背格好からすれば三、四歳くらいだろうか。赤いスキーウェアを着た少年は、ゆっくりとだが確実に雪を踏みしめてゆく。

そうだ。あのスキーウェアが、俺は大好きだったのだ。

なぜだろう。なぜあんなにも好きだったのだろう。

と、なぶるような強烈な風が吹いた。あまりの強さに彼の体はぐらりと傾ぐが、すかさずもうひとつの影が手をとって支える。

影は少年の手を握り、共に再び歩き出した。

大人、それも体の線から見て女性だろう。しかし、吹雪のためか、

長い前髪のためか、それともその俯いた表情のせいか、その顔ははつきりとしなない。ただ横顔の白さだけが夜の闇にぼんやりと浮いて見える。

「ごうごうと鳴る風のせいで、二人が会話をしているのかどうかもはつきりはしない。」

透の意識はいま、その様子をすべて、舞台上の出来事のように見ている。鳥瞰。神の視座から、透は雪山を眺めていた。

まるで外国の自主制作映画のようだ。

なんの意味も含蓄もない、ただ流れ出すだけの映像たち。

じつと目をこらすと、女性がなにやら手に荷物を持っていることに気づいた。

折れ曲がった棒状のもの。

そこで再び横殴りの風が吹き、記憶の中に白いノイズがかかる。

テレビの砂嵐のように雪が乱れ飛ぶ。

やがて嵐の音も遠ざかり

なぜ。なぜ忘れていたのだろう。こんなに大切なことを。

激しく脈打つ心臓と、背をしめらせた汗。気温のせいではない寒さを覚えながら、透は立ちつくしていた。

手のひらの上の雪片は、もう溶け出して、小さな生温い水たまりを作っている。それはやがて指間からこぼれ、消えていった。

透は戦慄を覚えながら、駆け出した。

あの女性は叔母だ。

母とは十歳も歳が離れていた叔母。

幼いころ、いつも遊んでもらっていた叔母。

透が十五のときに、はかなくなった叔母。

心の底から大好きだった叔母。

否、愛していた女性。

いまでも

そうだ。なぜ忘れていたんだろう。こんなにも大切な記憶を、俺

はなぜ忘れていたのだろうか。

当時叔母は十九歳で、彼女には大学生の恋人がいた。

その男は、その後行方不明になったのではなかったか？

死体が見つかったのはどこだった？

犯人は全身に鮮血を浴びたのではなかったか？

殺害日を割り出すのが簡単なら、それを偽証するのも簡単ではないのか？

彼女が握っていたのはひしゃげたストックではないのか？

道に積もった雪を跳ね飛ばしながら、真つ白な息を吐きながら、唇を噛み締めながら透は疾走する。これは悲しみなのだろうか。恐怖なのだろうか。

彼女が殺したのだ。彼女が。

「はっ、は、はあっ、はあっ」

次々とあふれ出る確信と真実に息を切らせながら、透は倒れかけるようにして玄関のドアを開ける。

物置に飛びこみ、古い衣装箆笥を開く。木がぎいとくししみ、閉じこめられたものをあらわにする。閉じこめられた罪。開けてはいけない箱。

次々と衣服を引き出しながら思い出す。

あのとき。

あの真つ白な部屋の中で、彼女はなんと言ったか。

「透」

とおるくんではなく。とおちゃんでもなく。透、と。

それは、彼女が俺の名前を初めて呼んだ瞬間ではなかったか。

彼女はそのことを知っていたのだろうか。

俺の中の喜びを、とめどない悲しみを、おびただしい憎悪を、欲望を、知っていたのだろうか。

「約束して。忘れるって。すべて忘れるのよ。すべて、時間が解決

してくれるから」

そうして彼女は目をつむった。

その唇が再び彼の名を呼ぶことはなかった。

瞳が、彼を見返すことは二度となかった。

透は首をふった。ふりつづけた。

すべてを　ただひとつの真実を否定したかった。

沢田祥子が、自らの頬に落ちるしずくの温度を知ることが、もう永遠にないのだということ。

だが、本当は違ったのではないか。

あのとき彼女が忘れてほしかったのは、彼女自身の罪ではなかったのか。

透はいつの間にか自分が泣いていることに気づいた。視界がにじみ、ともすれば噛み締めた歯の間から嗚咽がもれそうになる。

俺は間違っていたのか。

しよせん幻想に過ぎなかったのか。

あなたが俺を、愛してくれていたというのは。

物置の高窓から入る西日は急速に褪せてゆく。あらゆるものが色彩を失い、過去の中に置き去られる。世界にはセピアのトーンがかかる。

ついに透の手は、目当てのものを見つけ出した。

古びたスキーウェア。

「白……」

それは、真っ白な、真っ白なスキーウェア。

歳月を経ても色褪せない、すべてを赦すかのような純白。

「俺が……これを、好きだったのは……」

俺がこのスキーウェアを好きだったのは、おそろいだったからだ。彼女と。沢田祥子と

透は必死に、雪のような白さを抱きしめる。
いまにもそこから、大切な何かが溶け出してゆく気がして。
永遠に失われてしまいういで。

彼女と同じスキーウェア。

前合わせは、左前。

あなたが俺に、最後に望んだのはなんだったのだろう。
あなたを忘れることか。

それとも俺が　俺の罪を忘れることか。

絶望と真実とが耳鳴りになって彼を襲う。

空はついに闇に沈んだ。

その中に、声にならぬ悲痛な慟哭が響きわたる。

ひとつは破られ、ひとつは守られた約束。

霧島透は今年で、十九になる。

葡萄酒のように　了

(後書き)

本作品は、二年ほど前の企画提出作品（お題は「約束」でした）にちよつとだけ手直しを加えたものです。

ホラーっぽい何かにするつもりが、何を間違ったかミステリ風味のなんやかやになっていて驚いた記憶があります。

透の記憶に関しては、いくつかの変更点を除いて、実はあれはほぼ丸々私の記憶でもあります。ただ、周りの誰に聞いてもそんなことは知らないと言われるので、夢か何かと混同しているのかもしれませんが……

みなさんに楽しんでいただけたならば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6207t/>

葡萄酒のように

2011年6月5日17時55分発行